






# 近代貨幣の移り変わり











## —新貨条例から終戦まで—

明治政府は、1971(明治4)年、新貨条例を制定し、貨幣の単位を円・銭・厘に改め、純金二分(1.5グラム)を円の定量とし、円の100分の1を銭、銭の10分の1を厘としました。そして、本位貨幣として5種の金貨、補助貨幣として4種の銀貨と3種の銅貨を鑄造しました。物価は時代とともに大きく変化しましたが、現在私たちが慣れ親しんでいる通貨制度そのものは、この時に始まったものです。

今回の展示では、新貨条例以降、終戦までに鑄造された各種の硬貨のうち、少額面で、日常生活を送る上で身近な「お金」であった「1銭硬貨」の変遷を紹介します。

### 1銭硬貨の変遷

	名称	写真		製造期間	直径・量目・品位	説明
1	龍1銭銅貨 (明治7年)		(角ウロコ)   (波ウロコ) 	明治6～ 明治21	直径 27.87mm 量目 7.13g 品位 銅980/錫 10/亜鉛10	新貨条例による最初の1銭硬貨です。「以百枚換一圓」と刻印されおり、この1銭銅貨100枚で1円金貨と交換可能でした。 明治13年に龍のデザインが角ウロコから波ウロコに変更されました。
※	稲1銭青銅貨	***	***	明治31～ 大正4	直径 27.87mm 量目 7.13g 品位 銅950/錫 40/亜鉛10	明治30年3月、貨幣法が制定され、金本位制が実現しました。これにより貨幣が一新されました。日清戦争により従来の龍のデザインは使われなくなりました。
2	桐1銭青銅貨 (大正6年)			大正5～ 昭和13	直径 23.03 mm 量目 3.75g 品位銅 950/錫40 /亜鉛10	大正3年、第一次世界大戦が開始されると大戦景気に沸きました。金属の値段も高騰し、コスト削減のため、重さが半分近く減らされました。

3	カラス1銭黄銅貨(昭和13年)			昭和13	直径 23.03 mm 量目 3.75g 品位 銅900/亜鉛100	昭和12年に日中戦争が始まると、翌年6月に「臨時通貨法」が制定されました。これにより、政府は貨幣法の改定に依らずに、紙を含む新素材の小額通貨の発行が可能となりました。デザインは公募され、八咫鳥が採用されました。
4	カラス1銭アルミ貨(昭和15年)			昭和13～ 昭和15	直径 17.60mm 量目 0.90g 品位 アルミニウム1,000	軍需品として銅を確保するため、カラス1銭黄銅貨は、わずか1年のみの発行に終わりました。代わって、同じ図柄のアルミ貨が発行されました。
5	富士1銭アルミ貨(昭和17年)			昭和16～ 昭和18	直径 16mm 量目 0.65g 0.55g 品位 アルミニウム1,000	アルミニウムは航空機の原料として欠かせなかったため、量目を3割減らした、この富士1銭アルミ貨が発行されました。昭和18年にさらに0.1g減らされ、厚さが薄くなりました。
6	1銭錫貨(昭和19年)			昭和19～ 昭和20	直径 15mm 量目 1.30g 品位 錫500/亜鉛500	太平洋戦争後半期、アルミニウムの確保がますます必要となり、アルミ貨は回収され、錫を主体とする貨幣に変えられました。
7	未発行1銭陶貨			昭和20	直径 15mm 品位 三間坂粘土60%/泉山石15%/赤目粘土15%/その他10%	南方からの錫の輸入が困難となったため、陶貨の製造が計画されました。京都、瀬戸、有田で製造可能となりましたが、昭和20年8月に終戦を迎えたため、この陶貨はまぼろしに終わりました。